

白木 賢信
(筑波大学大学院)

[要旨]

本論文は、生活技術習得枠組による青少年の組織キャンプ分析を行うことによって、組織キャンプで用いられる生活技術の遂行状況の度合が、目標と比べてどのようであったのかを明らかにしようとするものである。検討にあたっては、組織キャンプの食事にかかわる一連の活動を事例とした。その結果、上述の度合は、全体的には目標通りで、米の炊き方や後片づけの仕方に関するものは目標より良かったことが明らかになった。逆に、食事にかかわる作業全体のうちでも最初の方で用いられるような、いわゆる準備段階の生活技術に関するものは目標より良くなかったことが判明したが、このことは、生活技術習得上の問題点の一つであり、今後の組織キャンプ・プログラムに関して、検討しなければならない課題でもあり考えられる。

I 目的

我が国の生涯学習推進における重要な課題の一つとして、青少年の学校外活動の充実がすでに挙げられているが¹⁾、これに関して最近は、自然体験活動の提供への関心が高まっている。例えば、生涯学習審議会答申『生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ』(1999年6月)は、子どもたちの地域でのさまざまな体験を充実させるための地域社会の環境づくりに関する基本的な視点を述べたうえで、緊急に取組が求められることの一つに地域の子どもの体験機会を広げることが挙げているが、その中で自然体験活動を重要視しているのである²⁾。このような自然体験活動を組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行うものが野外教育であるが³⁾、その研究では、これまでに、野外教育に参加する青少年の意識的側面に関する効果の他に、生活技術習得にかかわる効果も一部取り上げられている⁴⁾。生活技術を習得することは、現代の青少年にとって重要性を持つと考えられるので⁵⁾、今後はそれにかかわる未着手の研究に取り組む必要があると思われる。その場合、生活技術習得活動が青少年の野外教育でどのように行われ、またその活動の成果としてどのような生活技術が習得されたのかというような、青少年の野外教育における生活技術習得の特徴を解明する必要もある。

そのことに関して、これまでは、青少年の野外教育における生活技術習得活動の分析枠組を提出し、その有効性についての検討を行ってきた⁶⁾。しかし、これは、野外教育では生活技術習得活動のどのようなところにウエイトがかけられているかを明らかにするためのもので、野外教育の参加者が、上述の活動の成果としてどのような生活技術を

どの程度習得できたのかということをはっきりとしようとするものではなかった。そこで、本論文では、生活技術習得にかかわる問題の範囲を野外教育の一形態である組織キャンプに限定したうえで、生活技術習得枠組を用いた分析を行うことによって、生活技術習得活動の成果の一端を解明することを目指すことにしようと思う。しかし、その解明にあたっては、さまざまな側面からの検討が行われなければならないと思われるので、本論文では、生活技術の行使が組織キャンプではどの程度うまくなしてげられているかということを取り上げ（ここではそれを生活技術の遂行状況と呼ぶ）、それが目標と比べてどのようであったかという点に限定して検討することにした。

II 研究方法

1 分析枠組と分析方法

上述の目的を達成するために、今回は生活技術習得枠組を用いた分析を行うが、その枠組の作成にあたっては、生活技術をどのようにとらえるかが問題となる。技術にはさまざまな考え方があるが、本論文では、技術を一定の目的に達するための行動の仕方とし、さらにその行動の仕方を一連の計画的な手続きとしている⁷⁾。したがって生活技術は、生活における一定の目的に達するための一連の計画的な手続きとなる。その考え方をもとにして、生活技術（食事の場合）を第1図のようにとらえることにした⁸⁾。食事にかかわる作業を個人で行うか集団で行うかにもよるが、生活技術は図でいえば上から順に用いられていくと考えられる。なおグループ化は、分析の際、全体的な作業にかかわる生活技術、部分的な作業にかかわる生活技術を区別するためのものである。今回は生活技術をこの枠組でとらえたうえで、そのうちのグループA、B、Cの生活技術について分析した。具体的には、食事にかかわる活動で用いられる生活技術の遂行状況を、上述の枠組を用いて調べたうえで、今回はその度合が観察者の設定した目標と比べてどのようであったかを分析した。ここでは、この度合を生活技術の遂行状況の目標に対する到達度（以下、到達度とする）と呼ぶことにしている⁹⁾。なお、今回の到達度は、第1回観察（以下、第1回）と第2回観察（以下、第2回）の平均であるが、具体的にはキャンプ指導者の担当班への観察による評価値を用いている¹⁰⁾。評価値は、「目標よりよかった」を5点、「目標よりよくなかった」を1点とし、その間の評価は1点きざみで行う5段階評価によるものとした。

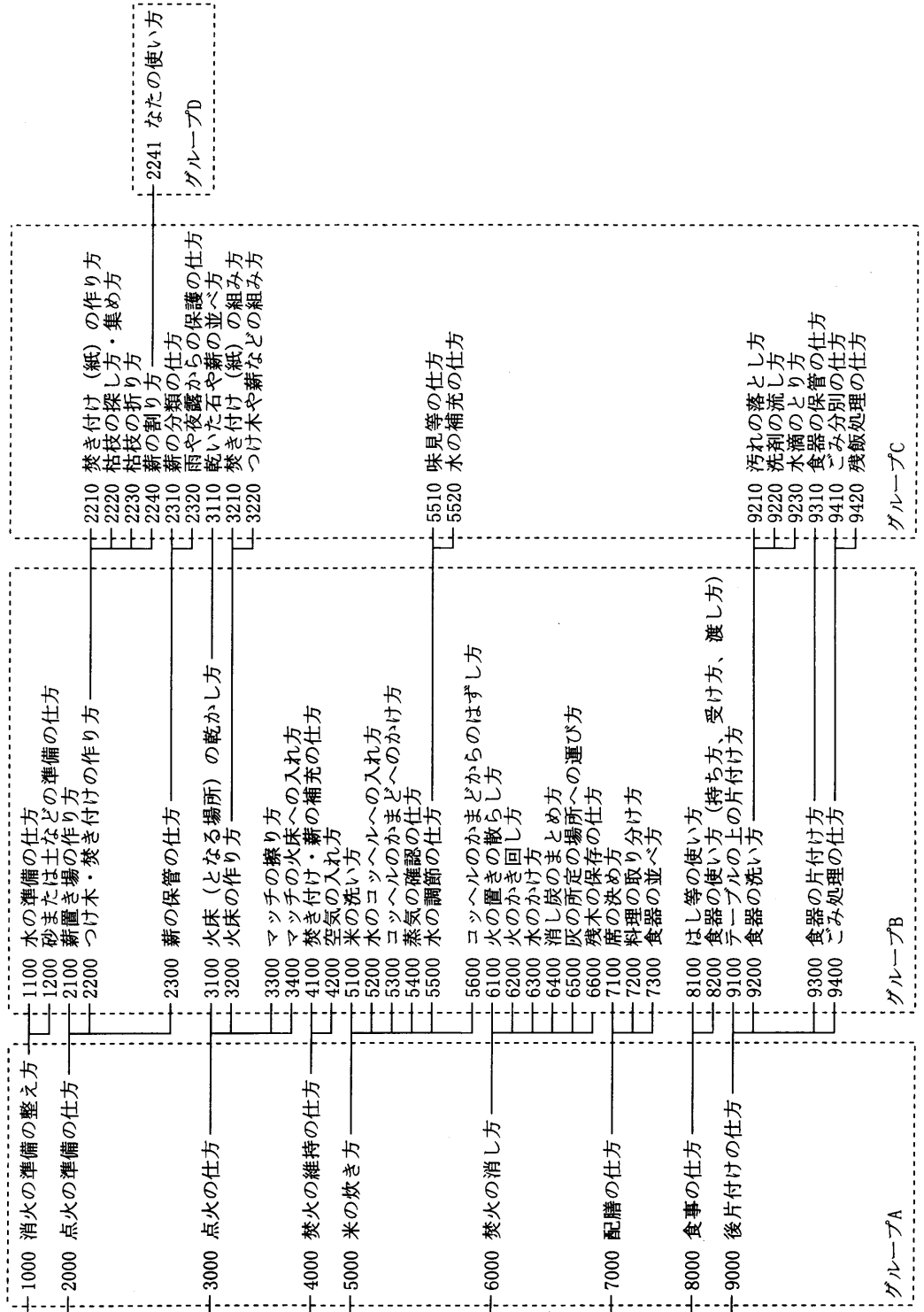
2 データ収集の方法

青少年の組織キャンプはいくつかの野外教育プログラムによって構成されており、生活技術習得はそのプログラムのさまざまな場面でなされる。さまざまな場面とは、たとえば、食事、設営、撤収、その他の各種自然体験活動である。今回は、そのうち食事（とくに米の炊事にかかわる作業）の場面に限定してデータ収集のための観察を行うことにした。なぜならば、食事は単一の組織キャンプにあっても繰り返し実施される活動の一つであり、枠組の有効性を検討するためにも、まずこの場面を取り上げる必要があると考えられるからである。以下は、その観察の概要である。

(1) 観察目的

組織キャンプでの生活技術習得の特徴、および生活技術習得上の問題点を明らかにする。

第1図 食事にかかわる生活技術—米の炊事の場合—



(2) 観察内容

組織キャンプ参加者（キャンパー）の食事にかかわる生活技術習得について、①生活技術の遂行状況、②生活技術の遂行状況の目標に対する到達度、③生活技術遂行の難易度、④生活技術遂行における指導者の援助の有無、⑤生活技術の遂行過程の観察を行う。

(3) 観察対象

青少年を対象とする組織キャンプ

(4) 観察サンプル（事例となった観察の対象）

青少年の組織キャンプ指導者団体S主催のキャンプ（具体的なキャンププログラムは第1表を参照）

期 間：1998年8月16日～23日（7泊8日）

場 所：静岡県立富士山麓山の村およびその周辺

参加者：62人（年齢：10～18歳、居住地域：静岡県）参加者は、男女学年混合の7班に分かれて活動した。

指導者：25人（そのうち全日程指導者は13人）上記の各班には、1名の指導者（キャンプカウンセラー）が割り当てられた。

第1表 観察サンプルのキャンププログラム

| 月日 | 午前 | 午後 | (夜) |
|---------------|-----------------------------------|--|------------------------|
| 8/16 (1日目) | | 入所式 オリエンテーション | 歓迎パーティー 選択プログラム①紹介 |
| 8/17 (2日目) | 選択プログラム① | ハイク、草木染め、皮細工、アニマル トラッキング、川遊び、紙すき、ウッ ドクラフト、バードウォッチング、 MTB、楽器作り、立体地図作りなどか ら毎日1種目を選択する。 | 選択プログラム②紹介 |
| 8/18 (3日目) | 選択プログラム② | | 選択プログラム③紹介 |
| 8/19 (4日目) | 選択プログラム③ | | 選択プログラム発表会 ハイク準備 |
| 8/20 (5日目) | ハイク 富士山麓山の村→大沢崩れ→富士山麓山の村（25km） | | ソロ ¹⁾ （選択制） |
| 8/21 (6日目) | 休養 | 料理博覧会準備 | 料理博覧会 |
| 8/22 (7日目) | 班別活動 | 演芸会 | 持ち寄りパーティー キャンプファイアー |
| 8/23 (8日目) | 後片付け 清掃、記念撮影 | 退所式 | |

(5) 観察方法

指導者による参与観察法（観察者：指導者8人（キャンプカウンセラー7人、その他の指導者1人）、被観察者：参加者62人、観察場所：静岡県立富士山麓山の村）

なお、前述の観察内容①～④の観察（以下、観察A）では、観察者7名が日時・観察班等の指示を受け、観察者は、その指示にしたがって観察した内容を、事前に配付し

た観察記録用紙にそって記録した。また、前述の観察内容⑤の観察（以下、観察B）では、7班のうち1班を任意に抽出し、観察者が指定された班の観察内容を事前に配付した観察記録用紙に記述した。その際、補助機器としてビデオカメラを使用した。

(6) 観察時期

第1回：1998年8月17日（キャンプ2日目）、第2回：1998年8月22日（キャンプ7日目）

(7) 観察記録用紙の回収状況

〈観察A〉回収数（回収率）：13（92.9%）、有効回収数（有効回収率）：12（85.7%）

〈観察B〉回収数（回収率）：2（100%）、有効回収数（有効回収率）：2（100%）

Ⅲ 研究結果および考察

まず、今回分析を行った生活技術全体の到達度がどのくらいなのかをみておくことにしよう（第2表参照）。各生活技術の到達度の平均を算出すると、2.97（第1回2.96、第2回2.98）で、「だいたい目標通りであった」の3点に近いことからほぼ目標に到達しているという程度であったといえる。またグループごとにみても、到達度は3.16から2.90という3点前後の値となっている。

第2表 グループ別にみた生活技術の到達度

| グループ | 第1回平均 | 第2回平均 | 両者の平均 |
|-------|-------|-------|-------|
| グループA | 3.14 | 3.17 | 3.16 |
| グループB | 2.98 | 2.93 | 2.96 |
| グループC | 2.83 | 2.98 | 2.90 |
| ----- | | | |
| 全体 | 2.96 | 2.98 | 2.97 |

各生活技術で、とくに到達度の高い生活技術、低い生活技術については、生活技術を各グループごとに到達度の高低の順に並べ、それらを四分位点による分割をし、上位群に入る生活技術を到達度の高い生活技術、下位群に入る生活技術を到達度の低い生活技術ととらえることにした。

第3表は、上述のような四分位点による分割をした結果、どのような生活技術がどこに属するのかを示したものである¹²⁾。このうち、上位群を到達度が第3四分位点より大きい生活技術、下位群を到達度が第1四分位点未満の生活技術として、上位群・下位群別の生活技術項目数を示したものが第4表である¹³⁾。これによると、上位群に多く含まれる生活技術としては5000台の米の炊き方にかかわる生活技術、9000台の後片づけの仕方にかかわる生活技術が挙げられる。これに対して下位群には、2000台の点火の準備の仕方にかかわる生活技術、1000台の消火の準備の整え方にかかわる生活技術が多く含まれている。

この到達度が低い方については、青少年の組織キャンプにおける生活技術習得上の問題点の一つであると考えられる。生活技術習得は青少年の組織キャンプの目標の一つに挙げられ、その成果に関しても最初で述べたような報告があるが¹⁴⁾、今回の研究結果にみられるような、あるひとまとまりの作業にかかわる生活技術でどの部分の到達度が低いかという点まではまだ明らかにされていないのである。

第3表 各グループにおける生活技術－到達度の四分位点による分割－

| | グループA | グループB | グループC |
|--------------------------|--------------------------|---|--|
| 第3四分位点より大きく、 最大値以下 | 9000(3.67) 5000(3.63) | 5100(3.63) 5200(3.63) 5300(3.50) 9300(3.50) 6200(3.38) | 9220(3.50) 5510(3.38) |
| 第3四分位点上 | 2000(3.50) | 5500(3.25) 5600(3.25) 6100(3.25) 9100(3.25) 9200(3.25) | 3210(3.25) 3220(3.25) 9210(3.25) 9310(3.25) |
| 第2四分位点より大きく、 第3四分位点未満 | 3000(3.33) | 8200(3.20) 2200(3.13) 6400(3.13) | 2240(3.13) |
| 第2四分位点(中央値)上 | 7000(3.25) | 3100(3.00) 3300(3.00) 3400(3.00) 8100(3.00) | 5520(3.00) 9230(3.00) |
| 第1四分位点より大きく、 第2四分位点未満 | 8000(3.20) | 7100(2.92) 4200(2.88) 9400(2.88) 3200(2.84) 5400(2.75) 6500(2.75) 7200(2.75) | 2210(2.88) 3110(2.84) |
| 第1四分位点上 | 6000(3.00) | | 9410(2.63) 9420(2.63) |
| 最小値以上、第1四分位 点未満 | 4000(2.75) 1000(2.25) | 2300(2.67) 7300(2.67) 6600(2.63) 2100(2.50) 4100(2.50) 6300(2.50) 1200(2.00) 1100(1.67) | 2310(2.34) 2230(2.17) 2320(2.17) 2220(2.00) |

※表中の数字は生活技術Noで、()内の数字はその到達度である。

第4表 上位群・下位群別の生活技術項目数

| | 1000 台 | 2000 台 | 3000 台 | 4000 台 | 5000 台 | 6000 台 | 7000 台 | 8000 台 | 9000 台 | 計 |
|-----|-------------|-------------|-----------|-------------|-------------|-------------|------------|-----------|-------------|---------------|
| 上位群 | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 5 (55.6) | 1 (11.1) | 0 (0) | 0 (0) | 3 (33.3) | 9 (100.0) |
| 下位群 | 3 (21.4) | 6 (42.9) | 0 (0) | 2 (14.3) | 0 (0) | 2 (14.3) | 1 (7.1) | 0 (0) | 0 (0) | 14 (100.0) |

※ ()内の数字は比率である。

先に述べたように、今回は、到達度が低いものとして1000台、2000台の生活技術のよ
うな、いわゆる準備段階の技術が挙げられるという結果が得られたが、その原因とし
ては例えば次のようなことが考えられる。第一は、現在のキャンプ参加者の特徴としてキ
ャンプにかかわる準備段階の技術が身に付いていないことである。これは最近、キヤ
ンプ場の設備が充実し、またキャンプ備品が便利になって、準備段階の技術をあまり身
付けていなくても、うまく次の作業に進むことがありうると考えられるからである。第
二は、これまでの組織キャンプでは参加者ができることやすべきであったことを指導者
側で事前に準備してきていたということである。例えば食事の場合、それにかかわる作
業(準備から後片付けまで)に要する時間は、1日の活動時間のかなりを占めている¹⁵⁾。
そうすると、他の活動のための時間を充分に確保できなくなる可能性が生じるので、そ
れを確保するためには、食事にかかわる作業の時間を短縮する必要がある、そのために

準備段階にかかわる作業を指導者側であらかじめ進めておいたりすることがある。この点については、今後、検討を加えていく必要があると思われる。

IV 今後の課題

今後の課題としては、今回のような生活技術習得の分析とこれまでに提出した生活技術習得活動の枠組による分析を組合せることによって、生活技術習得の特徴をより明確化していくことが挙げられる。今回取り上げた食事にかかわる生活技術について述べると、この技術は、生活技術習得活動の分析枠組からみれば、生物的機能維持の領域にかかわる技術の一つである¹⁶⁾。これについては、衣類や住居など他の生物的機能維持の領域のものや、あるいは他領域のものについても調べることによって、準備段階の技術が身に付いていないということが、生活のすべての領域で共通していえることなのか、あるいはある特定の領域のみにおいていえることなのか明らかになるとと思われる。今後は、枠組そのものの検討を行うと同時に、その点について解明していく必要もあろう。

その他の課題としては、到達度に影響を与えると思われる生活技術遂行の難易度や、生活技術遂行における指導者の援助の有無などについての検討や、生活技術の遂行過程の検討などが考えられる。

注

- 1) 生涯学習審議会答申『今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について』1992, 第2部第3章。
- 2) 生涯学習審議会答申『生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ』1999, III 1。
- 3) 青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議報告『青少年の野外教育の充実について』1996, 1. (1)。
- 4) 例えば、馬場進一郎・小泉紀雄・川畑智子・高田良平「キャンプ実習における学習内容の相違が実習生の野外生活技術の修得に及ぼす影響についての一考察—昭和62年度日本体育大学キャンプ実習を事例として—」(『日本体育大学紀要』17-2, pp. 143-153, 1988)。
- 5) 拙稿「青少年の野外教育における生活技術習得活動の分析枠組」(『日本生涯教育学会論集』19, pp. 57-66所収, 1998) p. 57。
- 6) 同, p. 59。なお、生活技術習得活動の分析枠組は第5表である。
- 7) 馬場敬治『技術と社会(第1巻)(馬場敬治著作選集VII)』(酒井書店・育英堂, 1970(初版1936)) pp. 7-8。
- 8) なお、図中の枠組内の項目については、次の手続きを得ている。
 - (1) 組織キャンプに関するテキストの内容を参考に、食事にかかわる生活技術の項目を抽出し、先の生活技術をとらえる枠組に当てはめた(松田稔『ザ・キャンプ—その理論と実際』創元社, 1978、平野吉直「野外炊事」(日本野外教育研究会編『キャンプテキスト』杏林書院, 1989, pp. 71-77所収) 参照)。また、観察対象のキャンプの指導者用マニュアルを参考に、項目の用語等の検討を行った。
 - (2) 組織キャンプ指導経験者2名(共に(社)日本キャンプ協会指導者資格所有)の意

見を参考に、項目の修正をした。

第5表 青少年の野外教育における生活技術習得活動の分析枠組
 -生活の領域別にみた野外教育プログラムでの生活技術習得活動-

| 野外教育プログラム | | 野外教育プログラム① | 野外教育プログラム② | 野外教育プログラム③ |
|-----------------|------------------|------------|------------|------------|
| 生活の領域 | | | | |
| 生物的機能維持の領域 | 衣食住に関する日常的な物質的満足 | ----- | ----- | ----- |
| | 睡眠や排泄など生物的動因の解決 | ----- | ----- | ----- |
| | 健康の維持 | ----- | ----- | ----- |
| 財・サービスの生産・分配の領域 | | ----- | ----- | ----- |
| 新成員の社会化の領域 | | ----- | ----- | ----- |
| 秩序の維持の領域 | | ----- | ----- | ----- |

※生活への意味付け・動機付けの領域は、表中の各領域の点線から下に位置付けられる。

- 9) ここでいう目標は、観察対象のキャンプ全体で設定されたものではなく、各観察者によって設定されたものである。また生活技術をどの程度うまく行使できるかは、観察対象のキャンプ以前の日常生活での諸活動や、観察対象のキャンプ以外のキャンプでの活動の影響も考えられる。したがって、今回の到達度は、それらすべてを含んだものであり、このキャンプによる技術習得度だけを示すものではないことを断っておきたい。
- 10) 1回分の観察結果のみを用いる場合、到達度がその観察時における天気などの自然環境条件や偶然性などの影響を受けることがある。ここではその点を少しでも避けるために、2回分の観察結果を用いている。
- 11) 諸澄敏之「冒険プログラム1（キャンプ場内及びその周辺で行なう活動）」（日本野外教育研究会編『キャンププログラム1（野外活動テキストシリーズ4）』杏林書院，1992，pp. 64-79所収）pp. 64-66などを参照。
- 12) 一般に、任意の定数 p ($0 < p < 1$) に対して、 $100p\%$ 分位点というのは、次のような値 a のことである。測定値を大きさの順に並べる。 a より小さい測定値の割合が $100p\%$ 以下であり、 a より大きい測定値の割合もまた $100(1-p)\%$ 以下のとき、 a を $100p\%$ 分位点という。このうち、 25% 分位点のことを第1四分位点といい、 75% 分位点のことを第3四分位点という。第2四分位点とは、メディアンのこと、 50% 分位点のことである（佐和隆光『初等統計解析』（新曜社，1974）pp. 42-43参照）。
- 13) この場合、上位群には、グループAの上位 22.2% 、グループBの上位 15.6% 、グループCの上位 11.8% の生活技術が入り、下位群には、グループAの下位 22.2% 、グループBの下位 25.0% 、グループCの下位 23.5% の生活技術が入ることになる。
- 14) 例えば、注4)を参照。
- 15) 今回の観察では、食事にかかわる作業に要した時間は、2回とも3時間程度であった。
- 16) 生物的機能維持の領域については、第5表を参照。